

しか考えてこなかった僕の頭に、大震災「前」の、比較的新しく、そして楽しかったもう一つの記憶を、問欠泉が一気に噴き上げるがごとく呼び覚ましてくれたと言っているのは、決して大袈裟な表現ではありません。

平たく言えば「三翠化学新聞」に同門会の原稿を書けという、怖ろしいけれどもありがたいメールなのであります。

そうなんです。

じつは大震災の六日前の三月五日、名古屋駅近くの

今、私は

鎌倉昌樹 (大42回)

私は平成六年に三重大学生物資源学部を卒業しました。その後、京都大学大学院農学研究科、民間企業を経て、現在、富山県立大学工学部生物工学科で講師として研究・教育活動に従事しております。私の研究対象は、動物(特にシヨウジョウバエとミツバチ)の発生生物学で、現在はミツバチの女王蜂分化誘導機構の解析やシヨウジョウバエを用いた形態形成の分子機構の解析などを行っております。私が昆虫を用いた発生生物学の研究を始めたのは今から六年前で、それ以前は民間の企業で機能性食品因子の研究を行ってまいりました。その当時与えられた研究課題がローヤルゼリーの機能性の証明というものでした。ローヤルゼリーは健康食品としてよく知られた素材ですが、当時ローヤルゼリーの機能性の科学的な証明がほとんどなされていませんでした。研究の結果、ローヤルゼリーの中から新たな機能性因子を見いだし、その作用メカニズムについても詳しく解析し論文として報告しました。私は、その研究を行っている過程で、ローヤルゼリーを分泌するミツバチの生態に興味をもつようになり、ミツバチは女王蜂と働き蜂からなる階級社会(カースト)を形成しており、同じ遺伝子型をもつ個体が幼虫の間に働き蜂が

「山海百味 そら豆」において、栄養の「三二同門会」が開かれていたのです。僕を含めて四名が幹事(発起人)となつて、「幹事がメンバーなどで簡単に声をかけられる範囲内」で「同門会をしようじゃないか」ということで、開催されたのでした。これが、忘れられない平成二十三年三月の、「もう一つの記憶」でした。

会には、古市幸生先生(前教授、現在名古屋女子大学教授)、梅川先生(大学教授、講師に就任したばかり、業生もしくは修了生とい

う、まさしく「三二」同門会でした。したがって、今回お声がけができなかった農学部時代の卒業生をはじめとする皆様や、都合が悪く欠席された皆様には、本格的な「同門会」はまたの機会にということ、今回はご寛恕いただきたくお願い申し上げます。

というわけで、言い訳ではないのですが、ここで「三二同門会」を開催するに至った経緯を、少しだけ暴露しておきましょう。

平成二十二年八月、久しぶりに津へ帰った折、三重大学に梅川先生をお訪ねし、続いて名古屋で古市先生とお会いする機会を得ました。その時の昔話の会話の中で、「栄養の同門会があるといいですね」というような話が出ました。私が切り出したのか、先生の方から切り出されたのかは記憶にありません。

この時はまだ「あるといいですね」のレベルだったのですが、九月上旬に東京で日本食品科学工学会があり、古市先生や若庵さん、大槻さん(平成一八年博士了、鈴鹿医療科学大学助教)らが上京されて、僕や堀部敦子さん(生二回卒、農学部時代の卒業生)をはじめとする皆様や、都合が悪く欠席された皆様には、本格的な「同門会」はまたの機会にということ、今回はご寛恕いただきたくお願い申し上げます。

その後、まずは幹事(というか世話人というか)を決めなければならなかったわけですが、結局のところ、呼び掛け人である僕と、時々顔合わせしている東京在住の堀部さんと小林謙一さん(生八回卒、東京農工大学助教)、そして、おそろしく同門会の場所は名古屋あたりになるだろうから、その近くにいる関係者ということで大槻さん、以上四名で幹事をやるうじやないかということになりました。

とはいえ、本格的な同門会を開くとすると、普段はそれぞれの仕事を抱える身として、はたとえ四名いたとしても事務量が大きくなりますので、とりあえず、先生方の了承を得た上で、「幹事が声をかけられる範囲内」で「こちまんとやりましょう」ということになったのです。

ところが、これがまた問題とさえいっていい問題でした。ね、「声をかけられる範囲内」という条件のじつに曖昧なこと!

必然的に「声をかけられる範囲内」というのは、現代日本のは、現代日本の情報通信事情を鑑みると、常識的には「電子メールが通じる範囲内」とい

うことになりませんが、ここであまりにも拘り定規になり過ぎるのも考えものです。ある卒業生A君とB君がいて、四人の幹事のうちの誰かが電子メールを送れるのはA君だけだったとします。で、A君に電子メールを送ったとして、A君とB君は同級生だから当然その情報はB君にも伝わる。さあそこで、B君には4人の幹事の誰も声をかけられないからダメ、というわけにはいきませんから、いわゆる口づて(もしくはメールを通じて)で、同門会の情報は広がっていくことになりました。

従って、今回の参加者の範囲というのは、正確には「幹事が声をかけられる範囲」ではなく、「幹事が声をかけることができ、かつそこから情報が伝わった範囲」ということになった次第です。

だいたい参加人数が確定したのは二月。その後、お店の予約を大槻さんが行い、そうして当日を迎えることになりました。

さて、会自体は昔ながらのチャンチャンバラバラ、あはははははは、ガハハハという感じでした。

会場の「山海百味 そら豆」の一階の中央付近を陣取るような形で、もちろん陣取るように配置したのはお店の人。三月五日、底冷えのする週末の夕方、七時に、栄養出身者三〇名が一室に会しました。

会は、木の柱や建具が「和」の雰囲気漂わせる薄暗くもしつとりとした空間で、幹事代表として堀部さんの挨拶、そして古市先生の乾杯の音頭によりスタートしました。特に「出し物」のようなものはありません。いくつかのテーブルの「島」に分かれて座席について、同門生たちは、適当に座を交代しながらわいわい、がやがやと、旧交を温めながら楽しく過ごすことができていました。

きましました。進行する会の途中では、栄養の現役教員である梅川先生と西尾先生の一言を頂戴しました。

特に出し物はなかったのですが、多くの出席者の印象に残っていたのが、辻輝也さん(生一六回卒、屋久島ガイドクラブ所属)による「みかん配り」による「みかん配り」だったようです。辻さんは当日、リュックサック一つで屋久島から中部国際空港に降り立ち、そのまま同門会に参加してくれました。ほかに、若手チームのテーブルでは、神山季実代さん(生一四回卒、O.V.I.E.松坂屋店商品開発担当)が関わっているバームクレーンが大変好評で、同門生の結婚式の引き出物に使われているという話で盛り上がり、ある程度歳を重ねたチーム(生物資源の卒回が「ヒトケタ前半」)のテーブルでは、当時の栄養を彷彿とさせるようないろいろなお話(マラソンの話や研究の話、はたまそれなりの年齢になってくるから仕事の話で盛り上がるなど、あちらこちらでいろいろな話題が、石つ

ぶつのように飛び交う楽しい会になりました。

最後に、遅参のお詫びを兼ねて僕がほんの一言ご挨拶した後、先生方を除く最年長者であった若庵さんの音頭による三重大学応援歌(めっちゃくちゃ気恥ずかしかったですが)で、見事! 締めくくられました。その後は三々五々となるはずですが、大人数で入れるお店は限られており、結局半数近くの参加者が近くの居酒屋にはしご。最終電車にのりそびれた人がいたとかいなとか……。

栄養の同門会は久しく開かれておりませんでしたので、今回は一部の同門生を対象とした「三二同門会」でしたが、出席者の皆さんは、それぞれが同門生として立場を越えて心より楽しむことができた会になったのではないかと思います。

出席者の一人からは、同門生たちが心から先生方を尊敬し、再会を喜ぶ雰囲気をひしひしと感じたという、嬉しい言葉もいただきました。思い出してみれば、僕が栄養にいた頃は、故高橋孝雄先生が教授、古市先生

が助教授、梅川先生が助手、そして西尾先生はまだ学生だった時代でした。今回集まってくれた同門生は、まさに三先生が厳しくも和やかに学生を指導されていた頃から、古市先生が高橋先生の遺志を継ぎ、教授として研究教育を牽引し、そして梅川先生が支えてこられた頃の栄養を見てきたわけです。僕にとつて三月五日の夜が、栄養の同門生にはそうした恩師の姿に再び接することを喜ばない人など居ないことを確信した夜になった、というのは、まさに幹事冥利に尽きると言ってもいいでしょう。

昔の仲間たちとの再会は、どのような状況であっても楽しく、心温まるものです。

この楽しかった一時の記憶が、大震災から復興しようとしているこの日本をこれから支えていこうと頑張っている参加者一人ひとりの中で、あの三・一一を乗り越える原動力になり続けていってほしいものだと、そう願わずにはいられません。

武村政春(大40回 生一回)



この写真は、平成二十三年八月二七日(木)に食品化学研究室・食品資源工学研究室の同門会が開かれました。場所は名古屋駅近くの庵CURU名駅です。ちなみに研究室同門会はこのところ、津駅と名古屋駅のどちらから開かれています。

平成二十三年八月二七日(木)に食品化学研究室・食品資源工学研究室の同門会が開かれました。場所は名古屋駅近くの庵CURU名駅です。ちなみに研究室同門会はこのところ、津駅と名古屋駅のどちらから開かれています。

今年度の同門会には二五名の方に出席いただきました。冒頭、久松先生から今年度

で定年を迎えられますが、継続雇用で来年度も大学に残られるとお話を頂きました。卒業・修了生からは、「エー、もうそんなに時間が経ってしまったの?」との声が上がりました。

今回の最年長は、勝崎裕隆先生でした。現在勝崎先生は生物圏生命科学生命機能科学講座の生物機能化学研究室にいらっしやるの

最後に、いつも同門会の事務方を担当してくれている研究室の学生さんたちに感謝します。次回もよろしくお祈りします。

三島 隆 (院29回)



武村政春(大40回 生一回)

◆挑戦

原 弘 (大8回)

一九五六年に入学、一九六〇年に卒業しましたが、勉強はあまり熱心でなく、むしろ運動に明け暮れていました。四年生になり故田中庄助先生の醗酵学教室にはいり、卒論として故澤田寿々太郎さんの指導のもと、グルタミン酸を醗酵法で生産する効率の良い菌を探す研究に取組みました。各地から取寄せた土壌から菌の分離と培養を毎日まじめに取組みました。当時、昇昇を使って無菌箱などを殺菌しておりました。数えきれない程分離しました。おおよそ千株ぐらいだったと思います。それは気が留めなかったのですが、夏頃に両手の爪が驚く程黒くなり、まるで墨でマニキュアをした様になりました。一九五九年の伊勢湾台風の時も、外はやけに風が強いなと感じていましたが夕方遅くまで一人、研究室で実験に夢中になっていました。外に出ると大きな木が根元から倒れたり、当時の校舎の屋根はスレート瓦でしたのでそのスレートが強風で剥れ、ビュンビュン飛んでくるのには肝を冷やしました。その後は皆さん御存知の災害です。

産生されました。卒業直前になっても卒論は手付かず、このままだと卒業ができませんが教授のいきな計らいで、就職してから提出することを条件に卒業を認めてもらいました。五月の連休明け迄かかりようやく纏めて提出した次第です。実験は順調に継続され、当時日本一のグルタミン酸の生産能力のある菌と判りました。このときの経験が社会人になってから現在迄生きており、「まじめにやれ、最後の最後迄あきらめな」と云うことです。

サラリーマン時代、製造現場勤務が一四年間、その後は営業部門勤務でした。当時、マージャン、ゴルフなどしている人を見れば、無駄な時間、金など浪費し、実際に稼がない遊びだと思っておりましたが、営業職になると酒やそれらをやらなると仕事になりませんでした。一生懸命やりました。実際やってみれば実に面白く、人脈も広がり、今も楽しんで仲間と遊んでおります。

体力が衰えた実感を感じ始めた五〇才代になりスポーツクラブに入会し水泳も始めました。最初は息継ぎがむづかしく五〇mも連続して泳げませんでした。何とか泳げる様に練習を続けている過程で色々と自分なりの工夫をしました。クロールでは息継ぎの時、水中で息を吐く。頭部はできるだけ水面より上げない。体を左右にローリングし乍ら腕を伸ばすと共に、顔の側面

油絵は九月の一陽展に出品する為、毎年F百号、サイズは一六二〇mm×一三〇〇mm、八方キ約一四三枚分の面積になります。描いており、今年もようやく八月中旬に仕上がりました。日本には全国規模の絵画グループが三百団体ぐらいあり、そのうち約二〇のグループが歴史ある団体です。一陽会も大きな団体です。東京上野にあった国立美術館が六本木に移転し国立新美術館と名称を変えまして。毎年九月より十月にかけて二週間開催され作品を出品、発表しております。絵を習い始めて十二年になり少しは良い作品ができるかと思っておりますが、まだまだ素人の中の素人です。考えが甘かったです。

今年七五才になりましたが幸せなことに大きな病気がせず、ゴルフ、マージャン、水泳もやり、今も食品会社で働かせてもらっております。有難い限りです。学生時代から今日迄関係してきた周囲の皆さんに支えて頂いていると痛感しております。今後も自分のペースで色々の事に挑戦したいと思っております。

三翠化学会の財政逼迫
定された暁にはご協力の程よろしくお願い申し上げます。

三翠化学会は昭和四十八年一月発足以来長い歴史を誇っております。初代会長嶋林先生の玉稿にもありますように、その間母校は農学部から生物資源学部へ改組されましたが、本会は農産製造科、農芸化学科、農芸化学コースの卒業生によって構成され、毎年一回会報「三翠化学」を発行し、活発に活動して参りました。

日常の活動は会員の皆様から頂いた年会費(当初五〇〇円、その後二〇〇円)により運営され、昭和五十三年―五十五年には会員からの募金による基金が設立されて、主として在校生と支部への支援が行われてきました。

平成十二年生物資源学部の改組にともなう農芸化学の名称がなくなり、三翠化学会への新会員の受け入れが停止され、これ以降は会が徐々に成熟していくことになりました。また、同窓会費は入学時に納入から三翠同窓会に一括して納入頂くことになり、三翠化学会でも卒業生である現会員からの会費納入を中止し、親同窓会に納入される会費の当会への配分で運営して参りました。しかし、時がたつて、改組後に入学―卒業する学生による同窓会への配分比率が相対的にふえ、我々旧来の同窓会組織への資金配分が減って参りました。現在は過去の蓄積を食い潰しながら活動しているのが現状です。

三翠化学会会長 小畑 仁

一九五六年に入学、一九六〇年に卒業しましたが、勉強はあまり熱心でなく、むしろ運動に明け暮れていました。四年生になり故田中庄助先生の醗酵学教室にはいり、卒論として故澤田寿々太郎さんの指導のもと、グルタミン酸を醗酵法で生産する効率の良い菌を探す研究に取組みました。各地から取寄せた土壌から菌の分離と培養を毎日まじめに取組みました。当時、昇昇を使って無菌箱などを殺菌しておりました。数えきれない程分離しました。おおよそ千株ぐらいだったと思います。それは気が留めなかったのですが、夏頃に両手の爪が驚く程黒くなり、まるで墨でマニキュアをした様になりました。一九五九年の伊勢湾台風の時も、外はやけに風が強いなと感じていましたが夕方遅くまで一人、研究室で実験に夢中になっていました。外に出ると大きな木が根元から倒れたり、当時の校舎の屋根はスレート瓦でしたのでそのスレートが強風で剥れ、ビュンビュン飛んでくるのには肝を冷やしました。その後は皆さん御存知の災害です。

産生されました。卒業直前になっても卒論は手付かず、このままだと卒業ができませんが教授のいきな計らいで、就職してから提出することを条件に卒業を認めてもらいました。五月の連休明け迄かかりようやく纏めて提出した次第です。実験は順調に継続され、当時日本一のグルタミン酸の生産能力のある菌と判りました。このときの経験が社会人になってから現在迄生きており、「まじめにやれ、最後の最後迄あきらめな」と云うことです。

サラリーマン時代、製造現場勤務が一四年間、その後は営業部門勤務でした。当時、マージャン、ゴルフなどしている人を見れば、無駄な時間、金など浪費し、実際に稼がない遊びだと思っておりましたが、営業職になると酒やそれらをやらなると仕事になりませんでした。一生懸命やりました。実際やってみれば実に面白く、人脈も広がり、今も楽しんで仲間と遊んでおります。

体力が衰えた実感を感じ始めた五〇才代になりスポーツクラブに入会し水泳も始めました。最初は息継ぎがむづかしく五〇mも連続して泳げませんでした。何とか泳げる様に練習を続けている過程で色々と自分なりの工夫をしました。クロールでは息継ぎの時、水中で息を吐く。頭部はできるだけ水面より上げない。体を左右にローリングし乍ら腕を伸ばすと共に、顔の側面

油絵は九月の一陽展に出品する為、毎年F百号、サイズは一六二〇mm×一三〇〇mm、八方キ約一四三枚分の面積になります。描いており、今年もようやく八月中旬に仕上がりました。日本には全国規模の絵画グループが三百団体ぐらいあり、そのうち約二〇のグループが歴史ある団体です。一陽会も大きな団体です。東京上野にあった国立美術館が六本木に移転し国立新美術館と名称を変えまして。毎年九月より十月にかけて二週間開催され作品を出品、発表しております。絵を習い始めて十二年になり少しは良い作品ができるかと思っておりますが、まだまだ素人の中の素人です。考えが甘かったです。

今年七五才になりましたが幸せなことに大きな病気がせず、ゴルフ、マージャン、水泳もやり、今も食品会社で働かせてもらっております。有難い限りです。学生時代から今日迄関係してきた周囲の皆さんに支えて頂いていると痛感しております。今後も自分のペースで色々の事に挑戦したいと思っております。

三翠化学会の財政逼迫
定された暁にはご協力の程よろしくお願い申し上げます。

三翠化学会は昭和四十八年一月発足以来長い歴史を誇っております。初代会長嶋林先生の玉稿にもありますように、その間母校は農学部から生物資源学部へ改組されましたが、本会は農産製造科、農芸化学科、農芸化学コースの卒業生によって構成され、毎年一回会報「三翠化学」を発行し、活発に活動して参りました。

日常の活動は会員の皆様から頂いた年会費(当初五〇〇円、その後二〇〇円)により運営され、昭和五十三年―五十五年には会員からの募金による基金が設立されて、主として在校生と支部への支援が行われてきました。

平成十二年生物資源学部の改組にともなう農芸化学の名称がなくなり、三翠化学会への新会員の受け入れが停止され、これ以降は会が徐々に成熟していくことになりました。また、同窓会費は入学時に納入から三翠同窓会に一括して納入頂くことになり、三翠化学会でも卒業生である現会員からの会費納入を中止し、親同窓会に納入される会費の当会への配分で運営して参りました。しかし、時がたつて、改組後に入学―卒業する学生による同窓会への配分比率が相対的にふえ、我々旧来の同窓会組織への資金配分が減って参りました。現在は過去の蓄積を食い潰しながら活動しているのが現状です。

三翠化学会会長 小畑 仁



写真:「磯焼け」平成22年度一陽会の入選作品です(国立新美術館にて)

大学の近況

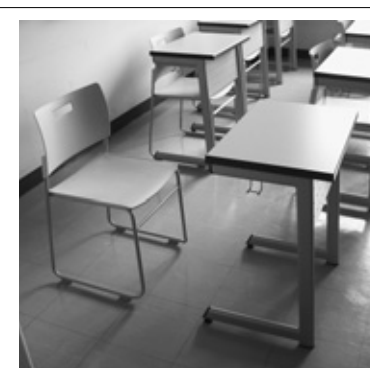


医学部附属病院新病棟が完成し、開院式典が挙行されました。(平成二十三年十一月二五日)

医学部附属病院新病棟

教室の机

大学に入学する前は、大学の教室は階段教室のようなイメージだったが、最初の講義で座った椅子は、机椅子一体型のものであった。この机椅子は多少カールチャイショックで、座りにくかった覚えがある。現在の講義室では、机と椅子は別々なものとなっており、また、全ての講義室に、天井から下り下げ式の液晶プロジェクターが配置され、講義、ゼミなどで、活躍している。一体型の机椅子は今でも、附属農場の講義室で使用されている。



左、かつて学部講義室、共通教育で使用されていた机椅子一体型のもの。右、現在、学部講義室で使用されている机椅子。



かつての講義室の面影を残す附属農場の講義室

三翠化学会のホームページのお知らせ

検索サイトで三翠化学会を検索したか、以下のURLでアクセスしてください。 URL: <http://sansui.bio.mie-u.ac.jp/dosokai/> kagaku/kagaku.html 機関紙「三翠化学」のPDFもダウンロードできます。同窓会、同期会、研究室の同門会の開催予告など

記念樹の今

農芸化学大2回生 卒業35周年記念樹 (平成元年9月30日植樹)



平成23年11月撮影



お知らせ

事務局より、「三翠化学」への皆様の投稿をお待ちいたしております。近況、なつかしの写真、同期会、同門会などを開催された幹事様、ぜひ、ご連絡ください。